



## Arts and Cultural Exchange 文化芸術交流

豊かで多様な日本の文化や芸術を  
さまざまな形で世界各地に向けて発信します。  
文化芸術をとおして日本のこころを世界の人々に伝え、  
言葉を越えた共感の場をつくり出して、  
また、ともに創造する喜びをわかちあって、  
人と人との交流を深めていきます。



## 文化芸術交流事業の概要

### 多様な日本の文化・芸術の海外への紹介

伝統芸能から現代アートまで幅広く、また衣食住の生活様式や価値観まで、多様で豊かな日本の文化や芸術を、公演・実演・ワークショップ、展覧会、映画・テレビ、翻訳・出版、講演・対話ほかさまざまな形で、世界の人々に紹介します。各地域・国の状況や需要に照らして事業計画を立て、特定の地域・国に向けては特に重点的、集中的に、また、広く世界各地に向けては継続的かつ効率的に、日本文化の紹介を進めています。また、日本の文化芸術に関する基礎情報を、インターネットなどを通じて世界に常時発信しています。

>>>P.17

### 文化・芸術を通じた世界への貢献

国を超えた専門家同士の交流や共同制作、協働作業を地道に積み重ねることで、文化芸術の各分野で強固なネットワークを構築します。また、日本の持つ経験と知見を活かして相手国が必要とする専門的な人材の育成を支援し、国際文化交流が持続するための基盤を整えます。更には、災害復興、環境、平和構築、文化遺産の保護・活用といった世界共通の課題について、文化や芸術を通して、日本の人々と外国の人々が共に考え、共感を深める場を作り出します。

>>>P.19



### 外交上重要な機会、地域・国への重点的な対応

日本・イスラエル外交関係樹立 60 周年、「日本・東ティモール友情と平和の年」（日本・東ティモール外交関係樹立 10 周年記念平和年）等の機会を活かして、アピール力の高い大型事業を行います。また、米国、中国、ロシアなど外交上特に重要な意味を持つ国々に向けて、それぞれのニーズに合わせて多様な事業企画を複合的に組み合わせて実施し、重点的な文化発信に努めています。

### 双方向型、共同作業型の交流事業

美術館や博物館の学芸員、舞台公演のプレゼンターやプロデューサー、映画監督、文化財・文化遺産保護専門家ほか、文化芸術活動を支える担い手たちを招へい・派遣し、国際シンポジウムや対話事業を継続的に実施することで、専門家間のネットワークづくりや関係深化を進めています。また、日本と海外のアーティストとスタッフが長い時間をかけて共に一つの舞台公演や展覧会を作り上げる場を創出し、その共同制作の成果である作品を国内外で紹介しています。

### 広く全世界に向けた継続的な事業展開

建築、デザイン、ポップカルチャーをはじめ多様なテーマで構成された国際交流基金巡回展、全 12 言語版の日本映画を揃えるフィルム・ライブラリー、劇映画やドキュメンタリーのDVD など、国際交流基金の文化リソースを活用した展覧会や映画上映会を、広く全世界で実施しています。さらに、日本のドラマやアニメ、ドキュメンタリー番組のテレビ放映、各国の国際図書展や美術展・建築展などへの継続的な出展など、さまざまな形で日本文化を紹介し続けています。

### 世界共通の課題への取組み

国境や言葉を超えた共感を生むことができる文化や芸術の力を活かし、世界と共に手を携えて、災害からの復興、平和構築、環境問題などのテーマに向き合うことを目指しています。2012 年度は特に、文化・芸術活動を通じて被災地の思いを世界と分かち合い、復興に向けて共に考え共感することが被災地の歩みを支えることを願って、東日本大震災からの復興に向け数々の事業を実施しました。

## 中国との青少年交流

>>>P.21

### 将来に向けた日中交流の担い手育成

日中両国の青少年を中心とする市民同士の交流を促進することにより、将来の日中関係の担い手を育成し、より幅広く、深い「心と心のつながり（＝心連心）」を形成することを目指して、双方向性と協働性を重視した事業を実施しています。



©Carol Melo / FOTOFORUM

1



2



写真提供：在カタール日本国大使館

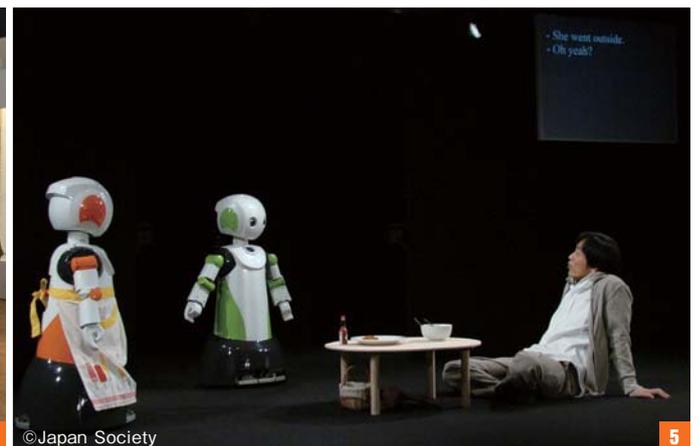
3

1. ブラジルに matochu のデザイナー堀畑裕之・関口真希子両氏を派遣、ファッションショーとレクチャーを実施した。2. ジャカルタで (株)コルクの佐佐島庸平氏と読売テレビ放送 (株)プロデューサーの永井幸治氏が、日本のマンガ・アニメ事情を紐解いた。3. 日本・カタール外交関係樹立40周年を記念して「第23回ドーハ国際図書展」に日本が招待国として迎えられた。書道の実演や折り紙の講習からロボット技術のデモンストレーションまで、幅広いジャンルのイベントは2万人以上の来場者を集めた。4. ローマ国立近代美術館における「近代日本画と工芸の流れ 1868-1945」展の展示風景 (→ P.41) 5. ニューヨークのジャパン・ソサエティで上演されたロボット演劇「働く私」



撮影：Mario Boccia

4



©Japan Society

5



# 多様な日本の文化・芸術の 海外への紹介

## 日本・イスラエル外交関係樹立 60 周年

2012 年は日本とイスラエルにとって、外交関係樹立から 60 周年を迎えた重要な年でした。国際交流基金はこの機会に、イスラエル初の歌舞伎舞踊公演、大型現代美術展「ダブル・ヴィジョンー日本現代美術」展、蜷川幸雄氏演出による日本・イスラエル現代演劇共同制作プロジェクト「トロイアの女たち」公演 (P.19 参照)、エルサレム国際映画祭ほか計 3 カ所での増村保造監督特集上映会、ハイファ国際映画祭における新藤兼人監督特集上映会等、年間を通じてさまざまな事業を多数イスラエル各地で行い、大勢の人々を魅了しました。

### ■ 歌舞伎舞踊公演

イスラエル博物館 (エルサレム) との共催により、歌舞伎を総合的に紹介する事業を実施しました。同博物館において、「女形」をテーマとする浮世絵コレクション展を 2012 年 7 月から 4 カ月にわたって開催し歌舞伎衣装を紹介した上で、8 月末に実施した歌舞伎舞踊の公演は、歌舞伎史上初のイスラエル公演でした。演目は「鷺娘」と「石橋」=写真。女形の中村京蔵氏と立役の尾上松五郎氏による華麗な舞と、総勢 8 名の長唄、三味線、鳴物の生演奏による本格的な歌舞伎公演が、イスラエル博物館および在テルアビブのダンスの殿堂、スザンヌ・デラール・センターで各 2 回上演され、満席の観客席は歌舞伎の美に惹き込まれていました。

公演に加えて行ったレクチャーでは、「歌舞伎の歴史」、「女形の基本」、「音楽と効果音」、「立役の衣装：獅子のできるまで」といったテーマのもと、長唄、三味線、鳴物を用いた歌舞伎音楽の特徴や、衣裳の着付け、化粧の仕方など、日本でも紹介される機会の少ない舞台裏を含めて多角的に紹介し、人々の歌舞伎に対する関心と理解を一層深める機会となりました。



©Miah

### ■ 「ダブル・ヴィジョンー日本現代美術」展

ハイファ美術館群のティコティン日本美術館とハイファ美術館の 2 つを会場として、2012 年 7 月から 12 月まで大規模に開催されました。モスクワからイスラエルに巡回した本展は、1970 年代から今日までの日本の現代美術を幅広く紹介するもので、「Reality/ Ordinary World」と「Imaginary World/ Phantasms」をテーマに、日露両国の若手キュレーターによって企画構成されたものです。国際的に活躍する著名なアーティストから新進気鋭の若手まで約 30 人の日本の作家による絵画、彫刻、写真、映像、インスタレーションなど、現地での新作制作も含めた多彩で示唆に富む作品が一堂に集められました。屋外に設置された、ヤノベケンジ氏による高さ 6 メートルに及ぶ巨大人物彫刻《サンチャイルド》(2011年) = 写真は、ハイファ市内でもひととき注目を浴びました。

イスラエルでは未だかつてない規模で日本の現代美術が紹介される貴重な展覧会として話題を呼び、イスラエル国内はもちろん、国外からこの展覧会を目指してハイファを訪れる人も多く、4 万人を越える記録的な入場者を集めました。



## 「日本・東ティモール友情と平和の年」(日本・東ティモール外交関係樹立 10 周年記念平和年)

### ■ ともにつくる音楽の輪 東ティモール音楽公演

東ティモールには時代によって異なるジャンルの音楽を抛りどころとしてきた歴史があり、音楽が人々のアイデンティティと強く結びついていると言われます。また、度重なる独立運動の影響もあり15歳以下の人口の割合が非常に高い国でもあります。こうした事情を踏まえて、外交関係樹立10周年の機会を捉え、これからの東ティモールの未来を担う青少年層に向けて、いずれも日本のみならず海外でも高い訴求力をもつ音楽家たち一廃材打楽器パーカッショニストの山口とも氏、歌手のおおたか静流氏、ヴァイオリン・ピオラ奏者の向島ゆり子氏一から成る特別ユニットによる公演とワークショップを、2012年11月、パウカウトとディリの2都市で行いました。

日本と東ティモールの文化がさまざまな部分で寄り添う場を作り出すことにより二国間の息の長い友好に繋がることを期待し、孤児院や高校、地元アーティスト団体施設などで交流事業を実施しました。ワークショップでは、「すべてのものに可能性がある」というメッセージを込め、現地の廃材を用いて打楽器を一緒につくって演奏。子どもたちの歓声と声援が常に会場中に響き渡りました。また、東ティモールで芸術活動を行う数少ない芸術団体の一つ、「アルテモリス」に所属する打楽器グループ「ハカ」とも、一緒

にセッションを行いました。セッションに慣れておらず最初は戸惑った様子の彼らでしたが、音を出すごとにお互いのリズムや呼吸が混ざり合い、演奏者全員が一つになっていく様子は感動的な瞬間でした。日本各地に根付く伝統音楽・民謡や、東日本大震災後に東ティモールから寄せられた支援に対する感謝の意を込めた楽曲、さらには東ティモールの歌謡などを取り上げ、「ハカ」との競演も交えたコンサートは、日本の音楽の紹介に留まることなく、両国で共に音楽の輪を作り上げる公演となりました。



©TOMO OFFICE

## 日米同盟深化のための日米交流強化—有力美術館における日本美術展

### ■ 「TOKYO 1955-1970: 新しい前衛」展

日米首脳会談に基づくファクト・シート「日米同盟深化のための日米交流強化」(2010年11月)のもと国際交流基金は、2012年より5年間にわたり米国で日本美術を紹介する本格的な展覧会を企画・支援します。2012年11月から3カ月間、ニューヨーク近代美術館(MoMA)との共催により開催した「TOKYO 1955-1970: 新しい前衛」展は、この5カ年計画の最初を飾る展覧会でした。

2012年から2013年にかけては米国の有力美術館で数々の日本現代美術展が開催され、国内外で関心を集めました。その中でも40万人が訪れた「TOKYO」展は、ひととき大きな評判となりました。1955年から1970年という激動期に経済復興を遂げた大都市東京で活躍したさまざまなジャンルのアーティストたちに焦点を当て、日本から出品した百数十点にMoMA所蔵品なども加えて、総作品数は300点に及びます。これまで海外で紹介される機会が少なかった具象的、身体的な表現を積極的に取り上げ、従来と異なる新たな視座を獲得した貴重な展覧会として、米国、日本のみならず海外の多くのメディアの注目を浴びました(P.11写真参照)。

この展覧会開催に合わせて、映画特集上映会「アート・シスター・ギルド(ATG)と日本のアンダーグラウンド映画 1960-

1984年」、戦後日本美術をテーマとしたシンポジウムやパフォーマンスが実施されました。日本の戦後美術に関する論文集『From Postwar to Postmodern, Art in Japan 1945-1989: Primary Documents』の出版への協力も含めて、第二次世界大戦後の日本の文化をより多角的に紹介し、米国の人々のより深い理解を得ることを目指しました。論文集は展覧会カタログとともに、今後の戦後日本美術研究のための重要な礎石となることが期待されます。



撮影: Jonathan Muzikar © 2012 The Museum of Modern Art, New York



# 文化・芸術を通じた世界への貢献

## 演劇の国際共同制作

将来的な交流の深化を見据えて数年にわたり他国と共同で制作に取り組むことは、互いをより深く理解し合うことに繋がります。2012年には過去数年がかりで他国と共同で制作にあたってきた演劇を完成させ、国内外で披露しました。

### ■「能と昆劇による The Spirits Play

#### 霊戯『記憶、場所、対話』プロジェクト

2012年10月に東京とシンガポールで、座・高円寺／NPO法人劇場創造ネットワークとの共催によって、『記憶、場所、対話』を上演しました。2年前に日本と中国が始めたこの共同制作の試みは、現代演劇の演出家、佐藤信氏（座・高円寺（東京）芸術監督）とダニー・ユン氏（進念・二十面體（香港）芸術総監督）の共同演出のもと、シンガポールの劇作家の作品を日中両国の伝統演劇の担い手たちと現代劇の俳優たちが共演するというものです。

東京では、早稲田大学演劇博物館と連携して「日中伝統演劇の現在と未来を考えるシンポジウム『能の体、昆劇の体』」を公演にあわせて開催し、学術面でのアプローチを加えた深いレベルでの演劇交流が行われました。また12月には、中国・南京の江蘇省演芸集団昆劇院主催「朱鷺フェスティバル2012」において、ワークショップやレクチャー・討論会などの形でプロジェクトを実現させ、日中関係に翳りがみえた時期での開催にもかかわらず、地に足のついた芸術交流となりました。3都市合計で2千人を超える観客が、その一体感を共有しました（P.11 写真参照）。



©Johnny Au

### ■「トロイアの女たち」イスラエル公演

2012年12月末から2013年1月初めにかけて、テルアビブのカメリシアターにおいて、日本・イスラエル外交関係樹立60周年を記念する、蜷川幸雄氏演出によるギリシャ悲劇「トロイアの女たち」が上演されました。この作品は、イスラエルのユダヤ系、アラブ系、そして日本という3つの異なる文化圏の俳優が出演する意欲的な試みとして、東京芸術劇場、カメリシアターと共同で3年がかりで取り組んできたものです。日本とイスラエル双方でのワークショップなど2年間の準備を経て行われた舞台稽古では、俳優それぞれが自らの経験や歴史に裏づけされた動きや表現を生み出し、異なる文化と歴史がぶつかりあう、刺激に満ちた協働作業が続きました。コロスが日本語、ヘブライ語、アラビア語で物語を語るという独自の演出によるこの舞台には、イスラエルでも公演前から高い関心が寄せられ、多くの人々が劇場に足を運びました。特に王妃ヘカベを演じた白石加代子氏の演技はイスラエルの観客を圧倒する迫力で、会場から惜しみない拍手が贈られました。公演は日本でも話題となり、イスラエルで好感をもって迎えられたこと、そしてこの共同制作が意欲的で意義深い試みであることが、新聞やテレビなどで報じられました（P.10 写真参照）。



© 宮内勝

## 専門家間のネットワークづくり

### ■ 日米学芸員交流

2008年より、米国の美術館からキュレーター等を招へいし日本の美術やアーティストを紹介するプロジェクトを実施してきました。5年目に当たる2012年度は、全米の有力美術館、大学等から写真専門のキュレーター、研究者など9名を招き、日本の写真や写真家を広く紹介するとともに、専門家同士の意見交換の場として、公開シンポジウムを開催しました。写真という存在が再び問い直され、さまざまな技術的実験が行なわれた1960年代後半から70年代という興味深い時代を主題に、両国の専門家による有益な議論が交わされました。

5年にわたる学芸員交流プロジェクトの成果として、来日したキュレーターの企画による日本あるいは日本人アーティストを紹介する展示会が米国で開催されるなど、ネットワークが広がっています。



日本の歴史的関係、多民族都市国家シンガポール固有の文脈、会場の常設展を踏まえた展示方法など、さまざまな課題に挑戦しました。

日米学芸員交流で行われたシンポジウム (IZU PHOTO MUSEUMにて) (撮影：相川健一)

## 震災復興への取り組み

### ■ 仙台フィルハーモニー管弦楽団ロシア公演

仙台フィルは東日本大震災で自ら被災しながら、その直後から数々のチャリティコンサートを行ってきました。震災からちょうど2年となる2013年3月、楽団の総勢120余人がロシアに向けて発ち、モスクワとサンクトペテルブルクで計3回の演奏会を開催しました。震災後にロシアから被災地へ、サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団から仙台フィルへと寄せられたさまざまな支援に感謝し、また、被災地が復興へと歩む姿を伝えるコンサートとして、実現したものです（P.13 写真、P.42 参照）。

震災の犠牲者への追悼として武満徹の「弦楽のためのレクイエム」、ドヴォルザークが遠く自らの故郷を想って作曲し、震災直後の復興コンサートでも演奏された交響曲「新世界より」、ヴァイオリニストの神尾真由子氏をソリストに迎えたチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲などが披露され、パスカル・ヴェロ氏指揮による演奏に、会場に詰め掛けた満員の観客は心を打たれたように聞き入りました。アンコールでの日本の唱歌「故郷」の演奏が終わると、楽団員が支援への感謝の意を伝える横断幕を掲げて歓声に応え、その姿に観客から一層大きな拍手が贈られて、音楽の力で復興に向かって歩む被災地の姿を力強く印象づける舞台となりました。



### ■ 詩と音楽による交流事業

#### 「南三陸一チリ はるかな友に心寄せて」

大地震と津波に見舞われた宮城県南三陸町と2010年2月のチリ大地震で被災したコンステイトゥシオン市の高校生たちが、被災経験を振り返って作った詩と物語を交換、詩と物語は歌となり、太平洋を越えた交流が生まれました。

南三陸町とコンステイトゥシオン市の高校生は、日本とチリ双方のアーティストによるワークショップを重ね、自分たちの国で起きた地震や津波の体験を振り返り、太平洋の彼方で同じ境遇にある同世代に思いを馳せながら、それぞれの気持ちや考えを詩や物語に表現し、交換し合いました。完成した詩や物語は、両国の音楽家の力を借りて2つの歌に昇華されました。

チリ大地震から3年目となる2013年2月末、日本側のワークショップに協力した東北地方ゆかりの音楽家たちがチリの被災地を訪れ、震災追悼式典で南三陸町の高校生たちの思いが込められた曲『はるかな友に心寄せて』を披露し、現地の高校生たちと交流しました。また、同年3月11日に南三陸町で行われた東日本大震災追悼式

には、チリ側のワークショップに協力した国民的歌手、ケコ・ユンゲ氏が参列し、コンステイトゥシオンの高校生たちの物語に基づく曲『太陽より遠くへ』を犠牲者に献歌しました。さらに、両国の音楽家が南三陸町の高校生有志とともに交流コンサートを行い、被災地同士、経験やヴィジョンを共有しました。太平洋を越えて互いに励まし支え合い、復興に向け共に歩む絆を深める契機となりました。



南三陸町での追悼式典で合唱を終え、志津川高校2年4組の生徒を称えるケコ・ユンゲ氏（撮影：相川健一）

### ■ 第13回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 日本館展示「ここに、建築は、可能か」

建築家の伊東豊雄氏の呼びかけにより始まった被災地のためのプロジェクト、陸前高田の「みんなの家」の設計過程を紹介しました。この「みんなの家」は、伊東に加え、若手建築家の乾久美子、藤本壮介、平田晃久、そして写真家の畠山直哉の各氏が被災地での調査と議論を重ねることによって、実現に至ったものです。

陸前高田市のパノラマ写真が貼りめぐらされた会場内に、津波の被害により枯れてしまった杉の木が多数立てられ、被災前と被災直後の陸前高田市の風景、設計の過程で各建築家により作られた100点を超える建築模型、記録映像、資料などが展示されました。家を失い避難を余儀無くされた被災者が集まって語り合うことのできる場を提供する「みんなの家」のプロジェクトを通して、建築は誰のために、何のために作るのか、という根源的なテーマを投げかけ、建築のあるべき姿を問い直そうとした本展覧会は、世界中の観客の共感と感動を呼び、2012年8月末から3カ月間の会期中に15万5千人もの来場者を集めました。この日本館展示は、パビリオン賞（「金獅子賞」）を受賞しました（P.9 写真参照）。



会場風景（撮影：畠山直哉）

## 日中交流センター

日中交流センターは、日本と中国の次代を担う若い世代の交流を促進するため、2006年に設立されました。中国の高校生を約11カ月間日本に招き、日本人と同じ学校・家庭生活体験を提供する「中国高校生長期招へい」、中国国内で日本の雑誌、マンガ、音楽などの最新情報を紹介する「ふれあいの場」設置・運営、日中両国の若者の交流のための派遣・招へい、情報共有・連携強化のための「心連心ウェブサイト」運営などの事業を通じて、さまざまな切り口から日中間の青少年交流を進め、顔の見える関係を築いています。

## ■ 卒業生同窓会の開催

「中国高校生長期招へい事業」では、これまでに7期、計237名の高校生を招へいました。第6期までの卒業生205名のうち77名が、大学進学のため2012年10月までに再来日しています。

同年11月、日本の大学に留学中の52名が集まり、「ふれあいの場」での交流事業経験者を中心とする日本の大学生20名と共に、これからの日中交流のために、学生として何ができるのかについて議論を行いました。交流のための交流ではなく、共に何らかの具体的な問題解決に取り組むことによって、継続性のある、より深い交流を目指そうとの意見が出され、さまざまな具体的なアクションプランが提案されました。問題解決に取り組む彼らの活動を今後も支援していきます。



## ■ 「心連心サマープログラム」の実施

2007年4月開設の成都を皮切りに、2012年8月までに中国の11都市に「ふれあいの場」を開設しました。各「ふれあいの場」では、日本語専攻の大学生を中心としたボランティア学生がイベント実施に参加し、運営の一翼を担っています。

日中国交正常化40周年に当たる2012年には、次の40年間の日中交流を担う日中の大学生の交流促進を目的として、延辺「ふれあいの場」で1週間のサマープログラムを実施しました。各「ふれあいの場」から推薦された代表学生26人と、公募による国内選抜を勝ち抜いた交流意欲の高い大学生グループの21人、計47人の参加者は、それぞれの出身地域に関するグループごとの発表や実演、日中混合チームによる開催地延辺の特色である朝鮮族文化の体験や長白山登山を通して、日中両国の風土・文化の多様性について理解を深めました。また、1週間の経験をもとに、日中交流において学生として何ができるのかを議論し、チー

ムごとの行動宣言としてまとめました(P.11 写真参照)。

今後とも各地の「ふれあいの場」とおして、日中の相互理解促進の意欲に満ちた両国の学生たちが出会い、友情を育み、交流の輪を拡大していくための事業を企画・実施します。



## ■ 東日本大震災の被災地を訪問

2013年2月、「中国高校生長期招へい事業」の第7期生32名が、特定非営利活動法人NICEおよび一般社団法人かさぎの協力を得て、東日本大震災の被災地・南三陸町と石巻市雄勝町を研修の一環として訪れました。

南三陸町の防災対策庁舎で被災者に祈りを捧げたあと、志津川中瀬町仮設住宅で暮らしている人々とともに「春節交流会」を開き、手作り餃子や歌・楽器の演奏などで精一杯の温かさを届けました。さらに、雄勝町での硯の石材搬出ボランティアや、塩害を受けた南三陸町の杉を経木の原料として応用を試みる「経木プロジェクト」に関するワークショップ等を通じて、教科書やテレビからは知ることのできない震災後の日本について学習し、理解を深めました。

